



2013.3.1

3月 ちとせだより

神戸YMCAちとせ幼稚園

わが国はストレス社会と言われて久しい気がしますが、このストレスも大人だけのものではなく、幼少年期の子どもにとっても大きなものであることが指摘されています。親自身が様々な不安を抱えていると、その不安が子どもの前でも様々な言動となって表れ、子どももそれを敏感に感じてまた不安になるのは当然のことです。さらに、子どもの将来を心配して、親は子どもに対して親の期待通りに動くことを求め、子どもは自分の感情や考えを自由に表現しにくくなっていることも、子どもにとってのストレスの大きな要因でしょう。自分の正直な気持ちを押しさえ込み、大人から認められること、評価されることばかりを求めていると、自分自身の考えや気持ち、そして自分の行動に自信を持ってなくなっても不思議ではありません。「～であらねばならない」「～することが正しい」といった規範を与えられ、指示されてばかりいるのであれば、自分自身の行動の基準となる本物の価値観を身につけることも難しいのです。

また、わが国の子どもたちの自尊感情が低いこともよく取り上げられますが、これも自分自身の価値観を形成できない子どもに表れる現象です。そして、この自尊感情が低いと、常に不安な気持ちを抱えたまま、「自分は値打ちのないだめな人間だ」と感じたり、「何をしてもうまくいかない」と思い込んでしまったりと、自分に対して自信を持ってないことになります。しかし、自尊感情とは、自分自身を基本的に価値あるものと認識する感覚であり、ここで言う価値あるものは他と比較して優れているといったものではなく、長所も欠点も含めたあるがままの自分を認め、その自分自身を受け入れて、愛することが出来る感情なのです。そして、他者との比較で自分を評価するのではなく、「自分にとっては本当に何が大切か」、「本当に何を自分はしたいのか」、そういった自分自身の価値観に照らし合わせて生きることが出来るためには、この自尊感情がなければならないのです。常に人の目を気にするのではなく、「自分は自分」、「自分はこれで良い」、そういった自分自身を確立することができるのが最も大切なのです。いくら心配しても、いつまでも親が側にいて子どもに対して指示をし、また守ってやることは出来ません。子どもたちは、それぞれ自分の人生を歩んでいかなければならないのです。そして、その鍵を握っているのは、親がどれだけ子どもを信頼し、子ども自身が自分で考えて自分の意志で行動できるように育てていくかにかかっているのです。自分自身で判断して行動してみても、その失敗も自分自身で受け止め、めげることなく自らで改め、そして自らの力を信じて更に歩むことが出来るのではないのでしょうか。

今年度の最後の時を迎えています。この一年、子どもたちが本当に自分自身を大切な存在として認め、そして自信を持つことが出来たでしょうか。また、親はあるがままの子どもを受け入れ、子ども自身が安心して甘え、安らぐことが出来るよりどころとなれたでしょうか。進級する子ども、そして何より小学校に進学する子どもたちが、胸を張ってその歩みを進めることが出来るようにお祈りしています。

年主題 「あふれる愛 小さなものとともに」

3月主題 「なかまと心はずませて」

聖句 “光の子として歩みなさい。”

(エフェソの信徒への手紙5章：8節)